

論文

『福井新聞』に見る戦時期日本へのユダヤ難民到来

——第二部：1941年——

菅野 賢治

【記事16】昭和16（1941）年2月15日（土）朝刊3面「難民部隊／三百五十名上陸許可」

欧州の戦禍より逃れた避難民全部三百五十名は十三日夜から十四日朝まで欧亜連絡船天草丸の船内で過して明日入国手続をした十四日午前十時全部の上陸を許されたのでユダヤ系外人は十四日中に上陸しゴードルマン氏¹⁾に引率され午後零時廿七分敦賀駅発列車で神戸にむかった [全文]

【記事17】昭和16（1941）年2月15日（土）夕刊2面「難民部隊／続々敦賀に上陸／欧州の戦禍を逃れて」

戦禍を逃れて欧州からはるばると海外へ渡航するユダヤ系外人の難民部隊は昨年来続々と来朝し、欧亜連絡船天草丸の入港日には之等の難民で敦賀埠頭や敦賀駅頭は文字通りに国際風景を描出してある十三日入港した天草丸からはき出された難民は三百五十名で、昨年秋から始めて記録破りの大部隊の来朝だった。彼等は欧州を閉出されて安住の地をアメリカやカナダに求めやうとするものでシベリヤ経由浦汐から敦賀へ、更に神戸、横浜から目的地へと逃避して行くのである。身のまはり品一切切詰め込んだ大小トランク、家財を携へて異国への旅を続けてあるがその中には無一文で着のみ着のまゝといふ旅行者もあつて、ユダヤ人協会の救ひの手にすがつてあるこれ等の難民はまだ三十万人も欧州方面にうようよしてゐると伝えられてゐるが、海外逃避の道は唯一つシベリヤ鉄道によって浦汐経由敦賀に上陸する経路があるのみであるから今後は欧亜連絡船天草丸、河南丸で敦賀にたどり着く難民は毎航急増する一方だと見られてゐる。これ等難民に対しては敦賀税関支署、警察署、憲兵分隊が防諜取締に万全を期し警戒を密にしてゐるが輸送に当る連絡船でも毎航

1 『神戸新聞』1941年12月18日夕刊の記事（金子マーティン『神戸・ユダヤ人難民1940-1941——「修正」される戦時下日本の猶太人対策』、みずのわ出版、2003年、251頁に引用）中、「神戸ユダヤ人協会」の一員として名前の見える「グーテルマン」、ならびに本稿後出口ゼ・ショシヤナの日記体回想録に登場する「グテルマン」と同一人物で、「神戸猶太協会アシケナージ派（The Jewish Community of Kobe (Ashkenazim)）がアメリカの「ジョイント」本部などに送った用箋のヘッダーに‘Board of Directors’の一員として明記されている「L. S. Guterman」を指すものと思われる。

超満員で大多忙を極めてゐる [全文]

本稿第一部の末尾にも記したとおり、ウラジオストック＝敦賀間の「欧亜連絡船」によるユダヤ難民の日本到来が、『福井新聞』上でふたたび報じられるようになったのは、前年1940年10月29日、「はるびん丸」の入港時以来、およそ三ヶ月半ぶりのことである。この間、報道の空白を説明づけるものとして、筆者は、(一) 1940年9月、「日独伊三国同盟」が締結され、その祝賀行事の一環として行われるヒトラー・ユーゲント代表団の日本行脚に地元の名刹・永平寺も組み込まれたことから、実際には1940年末～41年初めにも一定数のユダヤ難民が来敦していたにもかかわらず、『福井新聞』がその報道を手控えた可能性、(二) 横浜と神戸のユダヤ救援組織による対応が、ある時期以降、きわめて手際よいものとなったため、当局、官憲、世論の目をことさら引きつけずに済んだ可能性、ならびに (三) 1940年12月末、一時的ながらモスクワのトルコ領事館が通過ヴィザを発給するようになり、陸路パレスティナを目指すルートが開かれた結果、シベリア経由で敦賀に到来するユダヤ難民の絶対数が、いったん急激に落ち込んだ可能性などを指摘しておいた。

しかし、こうした諸要因の可能性も温存しつつ、ここでは、1941年2月半ばになってユダヤ難民の日本到来が「欧亜連絡船」一便だけで三百五十人という空前の規模をもって再開されることとなった、いわゆる「プッシュ要因」として、難民たちの出立地たるリトアニアの政治情勢も、少しく時系列を遡りながら正確に把握しておく必要がある。

*

第二次大戦開戦直後、1939年9月17日に東ポーランドへ軍を進めたソ連は、それまでポーランド領であったヴィルノ（ヴィルニユス）地区を中立国リトアニアに「返還」と発表し、実際に10月10日、それが実現された。これにより、ヴィルニユス地区に既住、もしくは戦争開始後に流入したポーランド人は、居ながらにして自動的にリトアニア領内における「難民」となる。10月28日、ソ連軍がヴィルニユス地区から撤退。12月にはヴィルニユス地区と旧来のリトアニア領の境界も撤廃されたため、流入ポーランド難民のなかでいち早くリトアニア脱出を希望する者たちは、首都カウナスへ赴き、ヴィザを求めて各国在外公館の門を叩くようになった。1940年1月、ソ連が拡大リトアニアとソ連領ポーランドのあいだの国境を封鎖した時点で、旧ポーランド領からヴィルニユスへ流入していたユダヤ教徒・ユダヤ人の数はおよそ一万四千人と推定されるが、その後も高額の仲介料と引き替えに専門業者の手引きで不法越境する者が後を絶たなかった。²⁾

2 Efraim Zuroff, "Rescue via the Far East: The Aspects to Save Polish Rabbis and Yeshiva Students, 1939-1941", *The Simon Wiesenthal Center Annual*, vol. 1, 1984, p.158.

東ポーランド掌握から九ヶ月を経た1940年6月15日、ソ連は、中立国リトアニアにふたたび軍を進め、翌7月21日に成立させたリトアニア・ソヴィエト社会主義共和国を、8月3日、正式に連邦に編入する。これにより、リトアニア領内の在外公館はすべて（前年8月末、杉原領事代理によってカウナスに開設された日本領事館も含め）存在意義を失ったとされ、8月25日までの撤収を命じられる。³⁾ このソ連編入が、共産化したリトアニアでの避難生活を望まないユダヤ難民たちを突き動かす第一の「プッシュ要因」となった。

この頃（日付不明）、リトアニアのテルシエイ・イエシヴァーでユダヤ教神学を学んでいたオランダ人学生、ナータン・グトウィルトとハイム・ヌスバウムが、カウナスのオランダ名誉領事ヤン・ツヴァルテンダイクに接触し、オランダ領西インドのキュラソー島を最終渡航先としてリトアニアからの出国申請を行うための協力を要請。ツヴァルテンダイクは、ラトヴィア、リガ駐在のオランダ大使、レネルト・ピーテル・ヨハン・ド・デッカーの指示を仰ぎつつ、彼らの要求に応じてやる。後日、グトウィルトから示唆を受けたポーランド・ミズラヒ運動のリーダー、ゾラフ・ヴァルハフティク（バルハフティク）が、直接、ツヴァルテンダイクと掛け合い、非オランダ国籍者のパスポートにも「オランダ領西インドのキュラソー島に上陸するためにヴィザは不要」という文言を、本来、追記されるべき「ただし現地総督の許可が必要」との付言を故意に書き漏らしながら、フランス語で記してやってもよい、との協力姿勢を引き出すことに成功した。⁴⁾ ここから、このいわゆる「キュラソー・ヴィザ」に「杉原ヴィザ」を合わせ、シベリア横断、日本経由の脱出ルートが開かれるようになった経緯は周知のとおりである。ヴァルハフティクによれば、1940年9月末の時点で、リトアニア滞在中のユダヤ教徒・ユダヤ人二千人以上が「キュラソー・ヴィザ」と「杉原ヴィザ」を併せ持っていたとされ、⁵⁾ そして実際に、彼ら、彼女らの一部が、本稿第一部で見たとおり、1940年10月の一ヶ月だけで三百人規模の難民集団として敦賀に到来したのだった。

しかし、ロシア国立人文大学のイリヤ・アルトマンによる最新の一次資料調査からは、当時、こうした難民たちのリトアニア脱出がソ連政府の意に完全になうものであった事実が浮かび上がってくる。1940年7月25日、ソ連副外務人民委員ウラジミール・デカノゾフと在リトアニアのソ連大使は、モスクワの党中央委員会に宛てた暗号電文のなかで、「難民をリトアニアに放置することは望ましくない」ため、「かれらに、至急ソ連通過を許可し、50-120名ずつのグループを編成して出発させることが相当」と主張し、四日後、党中央

3 阪東宏『日本のユダヤ人政策：1931-1945』、未來社、2002年、160-161頁。

4 Zuroff, "Rescue via the Far East", pp.162-163.

5 ゾラフ・バルハフティク『日本にきたユダヤ難民』（原著1984年）、滝川義人訳、原書房、1992年、160頁。

からの了解をとりつけているのだ。⁶⁾ 少なくとも1940年の夏～秋の時期について、「キュラソー・ヴィザ」と「杉原ヴィザ」が日本経由の脱出のルートを「こじ開けた」というより、むしろ、そうしたヴィザの発給が、ソ連ならびにソヴィエト・リトアニア政府の願望にもぴたりと一致するものだったことを知っておく必要がある。

半年ほどを経た1941年2～3月期、欧亜連絡船「天草丸」で毎便三百人以上ものユダヤ難民の敦賀来港をうながすこととなった第二の「プッシュ要因」も、やはりソ連の対リトアニア政策に密接に関係していたと考えられる。

1940年12月31日、ソ連政府は、リトアニアで活動している外国の難民救済機関の閉鎖を命じ、難民たち自身に対しては、1941年1月25日との期限を切り、ソ連国籍を取得するか、無国籍者となるかの二者択一を迫った。⁷⁾ この通達が、現地のユダヤ難民たちを大いに悩ませたことは、これまでも数々の証言、回想として語られてきたとおりだ。ソ連国籍を拒んで無国籍者となった場合の寄る辺なさ、反体制分子扱いの恐れは言うに及ばないが、かといって、いったんソ連人たることを受け入れてしまえば、以後、国外への出立を願い出するための根拠が失われてしまう。この時、いずれの選択肢を取った場合も最終的に待ち受けている危険（「ユダヤ人」としての差別待遇、シベリア強制労働キャンプ送りなど）には変わりがないとの判断を下した多くの人々が、前年の夏に取得済みであった「キュラソー・ヴィザ」と「杉原ヴィザ」にものを言わせ——あるいは、ものを言わせるべきそれらの書類さえ所持しないまま——、一斉に極東を目指し始めたと考えられるのだ。

キュラソー《ビザ》と日本の通過ビザをもつ難民の波に、この種の証明書をもたない者が加わった。彼らは一行にまぎれこんでモスクワへ行き、そこでビザをもっていないことがばれてしまったのである。ビザなしでウラジオストクへたどり着いた者もいる。この難民たちは、インツーリストの黙諾があつたりなかつたりしたのだが、旅費を全額払いこみ、あとは運まかせてモスクワの日本領事館でビザを取得しようとした。⁸⁾

従来、戦時期の日本に到来したユダヤ難民たちの境遇については、「ナチスの迫害を逃れて」という表現が固着してきた。しかし、1939年秋、ポーランドからリトアニアに逃れ、40年秋から41年春にかけてリトアニア脱出を決意、敢行した人々は、さらに共產主義体

6 イリヤ・アルトマン「ロシアおよび海外公文書館における「正義の人」杉原千敏に関する新たな文書の発見」、岡林英真訳、国士舘大学アジア・日本研究センター『Asia Japan Journal』第11号、2015年、64頁。

7 Efraim Zuroff, *The Response of Orthodox Jewry in the United States to the Holocaust*, New York, Yeshiva University Press, 2000, p.122.

8 バルハフティク、前掲書、172頁。

制を嫌い、ソ連による反ユダヤ政策を怖れて移動を開始した人々であったということを忘れてはならず、今後は正確さを期し、「ナチスの迫害を恐れ、ソ連体制への編入をも拒んだ人々」と表現すべきなのかもしれない。翻って、ナチスの迫害をいったんは免れながら、リトアニアの地でソ連体制に組み込まれることを肯じてしまった人々は、41年6月以降、西方からリトアニアに侵攻してきたナチス・ドイツにより徹底的に無化されることとなった、その運命の非情さも浮き彫りのようにして強調せねばなるまい。

1940年の夏、カウナスのオランダ領事館で「キュラソー・ヴィザ」を取得しておらず、1941年に入ってから脱出を決断した人々にも、まだ方途が残されていたこともわかっている。⁹⁾ ラトヴィアのオランダ大使ド・デッカーが、1940年8月末、リガの大使館の撤収を余儀なくされた時、その後もスウェーデン、ストックホルムのオランダ代表部に行けば同様の措置を講じてもらえるよう手配する、と言い残して任地を後にし、そして実際に1941年初め、多くの人々のパスポートと国籍証明書が、代表者により一括してヴィルニュスからストックホルムに持ち込まれ、「キュラソー・ヴィザ」と同等の認証を得ていた、というのである。ヴァルハフティクによると、1940年夏にカウナスで出された「キュラソー・ヴィザ」が1200通、その後、ストックホルムで出されたものが400通であったという。¹⁰⁾

同じくヴァルハフティクの回想によると、渡航書類のたぐいを一切持たないままソ連に入った人々のために、神戸のオランダ領事館で「キュラソー・ヴィザ」が出されたこともあったという。「1941年の初め、友人のナタン・ガトビルト [グトウィルト] がリトアニアから日本へ到着した。神戸のオランダ領事館に工作を依頼したところ、うまくいった。カウナスのオランダ領事館でやったのと同じ形式で、キュラソ/スリナム《ビザ》を数十通出してくれたのである。われわれはすぐさまモスクワとウラジオストクへ打電した。」¹¹⁾

さらには、ソ連領を横断してウラジオストクに赴くための根拠資料が必ずしも「杉原ヴィザ」(ないしその偽造品)ばかりとは限らなかったことを示す物証が、最近、発見されている。戦後、カナダに定住したユダヤ難民たちの足取りを丁寧に追跡してきたヴァンクーヴァー在住のジャーナリスト、高橋文が元ユダヤ難民の子孫から見せられたのは、「杉原ヴィザ」ではなく、在モスクワ日本大使、建川美次が発行した「渡航証明書」だった(書類を保存していた娘は、それも「杉原ヴィザ」の一つなのだろうと思っていたという)。¹²⁾

9 Zuroff, "Rescue via the Far East", pp.167-168.

10 ヴァルハフティク、前掲書、172頁。

11 バルハフティク、前掲書、173頁。この時、グトウィルトの協力要請に耳を傾けたオランダ領事は、ニコラス・アリエ・ヨハネス・デ・フォークト(1899-1977)である。息子ヤンによる以下のサイトを参照のこと。

<https://australianfriend.org/when-love-and-compassion-overcome-fear-and-hatred/>

12 高橋文「太平洋を渡った杉原ビザ、カウナスからバンクーバーまで」連載14「在ソ連大使館交付の『渡航証明書』—避難民を助けた外交官たち」、『バンクーバー新報』、2017年7月20日。

「杉原リスト」上には名前が見えないにもかかわらず、福井県が1940年11月に作成した「猶太避難民入国者表」（アジア歴史資料センター所蔵）や、兵庫県が1941年8月に作成した「避難猶太人現存者表」（同）などの上で日本到来の事実が確認される人々が、いかにしてソ連領横断ならびに日本海航海を正当化し得ていたのか、という疑問に対し、筆者は、本稿第一部において、（一）リストには逐一記載されなかった「番外」のヴィザを所持していた可能性、（二）1940年9月5日、杉原がカウナスを離れた後もスタンプを用いて発給され続けた偽造ヴィザを所持していた可能性を指摘しておいたが、¹³⁾ そこに、（三）1941年に入ってからリトアニア脱出を考え始め、渡航のための根拠資料を一切持たないままモスクワやウラジオストックまで突き進んだ人々に対し、建川美次や根井三郎から発行されていた証明書のたぐいを加えて（依然、その発行件数など不明の点を多々含みながら）、全体像の把握をやり直さなければならない時期にいたっていることだけは間違いない。

*

1941年2月13日、350名ものユダヤ難民を運び入れた「天草丸」は、ふたたびウラジオストックに戻り、十日後、今度は550余名というさらなる大集団を載せて敦賀港に入った。

【記事19】昭和16（1941）年2月23日（日）朝刊3面「湾内激浪のため／各船は出航不能に／天草丸はなほ日本海航行中」

敦賀地方はけふ廿二日朝九時ころから風速約十米内外南西の風が雨と共に襲来して、敦賀港内は激浪のために碇泊中の日満連絡船黒龍丸をはじめ全部の碇泊船の出航は不可能となった欧亜連絡船天草丸は新任駐日ソ連大使館付館員の一行八名、送還邦人二名、ユダヤ系の避難民三百四十三名、十九日午後浦塩出帆帰航の途につき日本海を航行中であるが廿三日午後三時ごろ敦賀へ入港する予定 [全文]

【記事20】昭和16（1941）年2月25日（火）夕刊2面「戦火に追はれたユダヤ人／五百五十余名また敦賀に上陸（廿三日）」

（敦賀）欧亜連絡船天草丸は廿三日午後三時帰港したが [中略] 例によつて流亡のユダヤ人部隊五百五十余名も大挙来朝した [後略]

入港予定日2月23日の朝刊では343名と告げられていた船客数が、翌々25日の夕刊で550

13 この偽造（ないし模造）ヴィザについては、イリヤ・アルトマン（ロシア国立人文大学の公文書調査により徐々に詳細が明らかになりつつある。アルトマン前掲論文、ならびに「模造「命のヴィザ」救いの標し リトアニア公文書館が保管」（『東京新聞』2018年9月2日）を参照。

余名に膨らんでいるのは、ウラジオストックから最初の乗船者数が打電された時には343名だったものが、出航間際になり、さらに200名以上が急遽追加分として押し込まれるなど、切羽詰まった事情があったためと推察される。

しかし、すでに前年1940年の8月10日に最初の例が見られたように、このなかから2名が、査証不備のためウラジオストックへの送還を余儀なくされている。

【記事21】昭和16（1941）年2月28日（金）夕刊2面「内外の船客も賑かに／天草丸きのふ船出／ユダヤ人二名が同船で送還さる」

欧亜連絡船天草丸は内外船客十六名を乗せて二十六日午後二時敦賀出帆浦汐に直航した〔中略〕なほ同船で去る二十三日欧州の戦禍を逃れて南米へ赴くユダヤ系ポーランド人二名が査証なかったため神戸ユダヤ人協会から二十円づつを恵まれて送還された

幸い、この2名も、前年の例同様、「天草丸」の次なる便で敦賀に再送されてくる。

【記事22】昭和16（1941）年3月5日（水）夕刊2面「ユダヤ人の部隊／けふまた敦賀に上陸」

欧亜連絡船天草丸は内外船客四百六名を乗せて四日午後五時ごろ浦汐から敦賀に入港した同船で外務省外交伝書使二名、ソ連人六名ほか欧州の戦禍を逃れて南北米へ移住するユダヤ系各人三百九十八名の大部隊が到着した

【記事23】昭和16（1941）年3月6日（木）夕刊2面「天草丸が六時間延着／日本海の猛吹雪に難航又難航」

欧亜連絡船天草丸は内外船客四百六名を乗せて浦塩出帆日本海の猛吹雪に遭遇難航を続け予定より六時間おくれで四日夜半漸く敦賀港に入港五日午前八時から検疫を開始した〔中略〕欧州の戦禍を逃れて南北アメリカへ赴くポーランド系ユダヤ人四百十六名の大部隊が来朝したが同船で査証不備のため浦塩へ送還されたポーランド人二名が再び逆送なほユダヤ人部隊の一行は今夕上陸を許可され神戸に向ふ予定

ここでも最初、406名中「ユダヤ系各人」398名として乗船者の内訳を報じていた『福井新聞』は、翌日、406名を載せた船から416名の「ポーランド系ユダヤ人」が下りて来たなど、数字の齟齬を露呈させている。こうした細部からも、ウラジオストックでの乗船者数が、出航間際になって急遽水増しされるなど、現場の混乱した様子が伝わってくるようだ。

この3月4日入港の「天草丸」には、ポーランド、ウッチ出身のイディッシュ語演劇女優ロゼ・ショシャナ（1895-1968）とその夫レイゼル・カハンも乗り合わせていた。その後、

神戸、上海での避難生活を経て、戦後、アメリカに移住した彼女がイディッシュ語で刊行した日記体の回想録『火と炎のなかで』から、敦賀港到着の部分抜き出しておく。

[1941年] 3月5日

なんとか生き延びられた！ 神様のおかげで、私たちは恐怖も乗り越え、「ツルガ」という港に到着した。自分たちはどのような危険のなかにいたか、船は沈没しかけていたが、航路をなんども変えながら前進し、困難を脱していたということが、私たちは今になってようやく分かった。こうして通常は36時間の航海に60時間もかかった。航海上の危険は神戸ですでに知られ、私たちは早々に電報を受け取っていた。なんと幸運なことだろう。さっそく神戸の「Jewcom」の代表が船に乗り込んできた。シベリア出身のユダヤ人グテルマン（Guterman）とシエドルツェ出身のユダヤ人ストロヴィ（Stolovi）である。私たちは彼らの助けを借り、通関にかかる費用も払ってもらい、あらゆる手続きを済ませて下船して、私たちを神戸に連れていってくれる列車を、待っているところだ。私たちはみな、神戸のユダヤ人を、大きな感謝の眼差しで見つめている。この人たちにたいする感謝の念がどれほどのものか分かるだろう。なにもかもが素晴らしく見える……。なにもかもがとても静かだ。大きな編み笠を頭にかぶった、日本人の沖仲仕たちは、路地に雪が積もっているというのに、たいへん静かに働いている……。これは私たちのものとは異なるひとつの別世界だ……。線路の上を満員の軌道車がたくさん通り過ぎる。そこへ一台の列車が停まる。おびただしい人が車内から下りてくる。色鮮やかな着物を着て、背中に子供をおぶった女たちが、ピロード張りの座席に座っていて、子供は小さなお顔のなかに、目というよりは黒い点があるといったほうがいい、かわいらしい黒い頭を窓から覗かせている。¹⁴⁾

このように2月中旬から3月初旬にかけてのわずか三便だけで、実に千三百人以上のユダヤ難民が到来するという事態をうけて、『福井新聞』は、3月8日の夕刊に、後にも先にも例を見ない長大な記事を二本掲載している。

【記事24】昭和16（1941）年3月8日（土）夕刊2面「新欧州閉出しのユダヤ人／続々わが国に流入／敦賀へ毎航海に三百乃至四百」

シベリア経由で安住の地南北米の新天地求めて来着するユダヤ系避難民の数は浦汐

14 R.[Rose] Shoshano Kahan, *In Faier un flamen*, Buenos Aires, 1949 (reprint: National Yiddish Book Center, Amherst, Massachusetts [undated]), pp.266-267. イディッシュ語原文からの訳は、黒田晴之氏（松山大学）、西村木綿氏（金沢大学）による。両氏のご協力、ご教示に対して深くお礼申し上げる。

一敦賀間欧亜連絡船天草丸で毎航海四百乃至三百名の大部隊が敦賀に上陸してゐるがこれらの中にはその目的地さへ判然としてゐないものがありはなはだしきは目的地がイラン行蘭印行、米国行などの査証をいくとほりにも所持してゐるものがあり、あるひは又日本永住の希望を有してゐるものもあるなど日本上陸が彼等の最終目的の如き観を呈してゐる。彼等の多くはカウナス日本領事館の査証とポーランド旧政府の避難民証明書とをもつてをり中にはロンドンに数万ポンドの銀行預金を有してゐると称する者もあるかと思へばパンすら求める無一文のものもあり目的地の便船に乗りきれないものが神戸に多数滞在の有様で今後シベリア経由で渡来する彼等難民の数は推定約三十万人といはれてをり毎月約千余名の者が来着してゐるわけであるが、米国アルゼンチン国等の物資が危険なる航海のもと、はいひながら船舶によつて欧露の港湾に出入してゐるのは遙々陸路シベリアによつて来るといふ現象を示してゐるのはその裏側にあるひは国際的關係が多分に含まれてゐることは勿論である日本の人道的立場よりする彼ら難民への便益供与も彼らの数が余りにも多いのと目下難民の渡来数と出港数とは一致しないため神戸に溢れてゐる彼らの移住先については当局も腐心してゐる始末であるが最近の米国当局の探りつゝある難民入国拒絶主義により日本に立往生してゐる彼らはこのまゝで行けば内地はユダヤ人の氾濫を見る恐れがあしり [ママ] 厄介な問題を提供て [ママ] ゐる [全文]

【記事25】昭和16（1941）年3月8日（土）夕刊2面「ユダヤ人の氾濫で／敦賀駅案内が困惑／警戒すべき内地への移動情勢」

敦賀駅案内所では欧亜連絡船天草丸入港毎に欧州の戦禍を避けて横浜あるひは神戸を経由し安住の地南北米の新天地を求めて赴く亡命ユダヤ人四百名乃至三百名の大部隊が上陸駅待合室は身動きならぬ混雑を呈し声をからして叫んでゐる一列励行も彼らには何等の反応もなくさながら洪水の如き有様なので同駅案内所主任後藤書記は彼等にも旅行道徳観念を大いに植つけてやらうと案内掛を出動し大童で整理にあたつてゐるが最近では案内所の窓を叩き“道しるべ、を乞ふ彼等が殺到し応答にもソウトウの時間を要すので兎も角英文で敦賀発米原乗換へ発着横浜神戸着時間等を窓口に掲げて親切な案内に当つてゐるが防諜に関連するやうな質問には十二分の注意を払ふ一方彼等の行動に対しては万全の警戒を行つてゐる

実のところ、この時、混乱を極めていたのは敦賀の埠頭と駅頭ばかりではなく、東京の外務省本省と、モスクワ、ウラジオストック、新京、さらには杉原千畝の新任地プラハの在外公館のあいだでも、非常に切迫した電文が交わされていた。以下、外交史料館文書「ユダヤ人問題」を踏査したパメラ・ロトナー・サカモトと阪東宏の先行研究に依拠して時系

列にまとめるならば——¹⁵⁾

・2月1日 モスクワ大使、建川美次より松岡外相に宛てて、リトアニアからモスクワの日本大使館にやってきた22名について、ウラジオストックで日本通過ヴィザを得させてやることを人道上の見地から認めてもらいたい旨、打診。

・2月3日 モスクワ大使、建川美次より松岡外相に宛てて、目下、約八百名のポーランド難民がソ連領内を東に向けて移動中であるが、その全員をウラジオストックで乗船させるのは困難であるため、半数の四百名は満州国を通過させてはどうか、提案。

・2月5日 プラハ総領事代理、杉原千畝より松岡外相に宛てて、前年、カウナス領事館で彼が発給した日本通過ヴィザは2132通であり、うちユダヤ人への発給は1500通程度であったと認識している旨、報告。

・2月8日 ウラジオストック総領事代理、根井三郎より松岡外相に宛てて、ウラジオストックでは、前年、カウナスで発行された日本通過ヴィザをもって、シベリア、日本を経由し、北米、南米を目指すユダヤ人が急増し、船一便につき140～150名に達している。なかにはヴィザを持っていない者もあり、ウラジオストックでそれを取てできるか、という問い合わせが殺到しているが、発給してよいか、打診。

・2月9日 「神戸ユダヤ人協会」会長アナトリー・ポネヴェイスキー（1900-69）より松岡外相に宛てて、目下、四千百名ほどのリトアニアならびにポーランドのユダヤ人が国外脱出を試みているが、前年8月、カウナスの日本領事館が閉鎖されたため、うち約三千人は、いまだ日本通過ヴィザを取てできていない。ついては、モスクワの日本代表部でそれが発給されるよう取り計らって欲しい、と要望。¹⁶⁾

・2月10日 松岡外相よりウラジオストックの根井総領事代理に答えて、神戸のユダヤ人協会に問い合わせたところ、多数の避難民の世話は引き受けられない、とのことなので、ヴィザの発給は控えるべきことを指示。¹⁷⁾

・2月18日 外務省本省より新京大使、梅津美治郎に対し、ソ連領通過中のユダヤ難民に、満州里にて、百通ほどの満州通過ヴィザを発給してやることは可能か、照会。

・2月21日 ウラジオストックの根井総領事代理より松岡外相に宛てて、すでにウラジオストックまでやって来た22名のユダヤ人から日本通過ヴィザの発給を求められているが、どうすべきか、打診。

15 Pamela Rotner Sakamoto, *Japanese Diplomats and Jewish Refugees: a World War II dilemma*, Westport, Praeger Publishers, 1998, pp.144 and 147; 阪東、前掲書、177-180頁。

16 この嘆願書については、バルハフティク、前掲書、202-203頁、ならびに、金子マーティン、前掲書、233-234頁を参照。

17 前日、「神戸ユダヤ人協会」から外相に宛てられた請願書の内容に照らして、協会が避難民の世話を拒んでいるという部分は事実大きく反していたと思われる。

・2月22日 モスクワの建川大使より松岡外相に宛てて、満州通過を希望しているポーランド・ユダヤ難民は七～八百名であること、ならびに、ソ連外務部からは、五十から百名のグループに分けて一ヶ月半ないし二ヶ月以内に輸送を完了したい、という希望が寄せられていることを報告。

・2月25日 松岡外相よりウラジオストックの根井総領事代理に宛てて、日本国内に停滞している避難民がすでに千二百名に達し、その処理に困っているため、最終渡航先が確認されない人々に日本通過ヴィザを発給しないよう、指示。

・3月5日 モスクワの建川大使より松岡外相に宛てて（満州里で百通ほどのヴィザ発給は可能という新京からの返事をうけて）、百名分では少なすぎると抗議。

・3月7日 松岡外相からモスクワの建川大使に宛てて、（一）以後、在外公館における通過ヴィザの発給には本省の許可を要すること、（二）ソ連領内の避難民の満州通過は百名に限定すること、二点を通達。

・3月12日 モスクワの建川大使より松岡外相に宛てて、目下、モスクワには二～三千人のユダヤ難民が滞留していると見積もられること、その多くが、前年、カウナスで発給された日本通過ヴィザを所持している模様であること、しかし300名以上がモスクワ大使館にヴィザを申請していることを報告し、モスクワでの申請者には、訓令を遵守し、一切応じないことにしている旨、付言。

・3月14日 モスクワの建川大使より松岡外相に宛てて、3月7日の通達をそのまま実行に移すことは困難、として反論。

総じて、モスクワの建川とウラジオストックの根井が、ソ連当局からの要請にも押されて難民たちのソ連通過、日本上陸を実現させようとするのに対し、本省が種々の煩瑣と混乱を恐れ、それに制動をかけようとする様子が読み取れる。総勢八百人をウラジオストックと満州里で折半して処遇してはどうか、という建川の案に対し、本省が新京の大使館に対し「百通」まで数を落として打診しているあたりも、本省から在外公館への遠慮を感じさせて興味深い。¹⁸⁾

その間も敦賀の現場では、査証不備者が、もはや船一便につき数名といった規模ではなく、一度に七十数名も漂着して入国管理当局を困らせる、という事態に立ち至る。

【記事26】昭和16（1941）年3月14日（金）夕刊2面「天草丸けふ五時入港／ユダヤ人三百五十名を乗せて」

欧亜連絡船天草丸は船客三百六十七名うち日本人一名、ソ連人七名その他欧州の戦禍を逃れて南北米の新天地に赴くユダヤ人三百五十名を乗せ十一日午後五時浦汐を

18 新京発行のヴィザをもって満州国を通過した人々がいたのかどうか、管見の限り、未調査。

出帆した同船は十三日午後五時敦賀に入港の予定である [全文]

【記事27】昭和16（1941）年3月15日（土）夕刊2面「天草丸——／予定を遅れ入港」

欧亜連絡船天草丸は浦汐から船客三百五十名をのせて予定よりおくれで十三日夜〇時敦賀に入港十四日朝八時から検疫を開始した [中略] 欧州の戦禍をのがれて流浪の旅をつづけてゐるユダヤ系十七ヶ国人三百六十一名が来敦したがこの内南北米に赴くラビ教生徒八十名も居り、見せ金も査証不備の者多数あるため当局をなやまして居るが上陸は同日午後許可された

【記事28】昭和16（1941）年3月18日（火）夕刊2面「船中に涙の場面／天草丸で送還されたユダヤ人」

欧亜連絡船天草丸は内外船客七十九名を乗せて十六日午後二時敦賀出帆浦汐に直行したが [中略] 同船で去る十三日欧州の戦禍を避けて流浪の旅をつづけてゐるユダヤ人七十四名が査証不備の点と所持金不足のため浦汐に向け送還されたが彼等のうち〇六名も交はつてをり送還と決るや泣きの涙で船中はしばし悲劇の場面を見せた

この出来事についても、ロトナー・サカモトと阪東が外交史料館文書から紡ぎ出した情報により、舞台裏の事情を克明に把握することができる。¹⁹⁾

・3月15日 「神戸ユダヤ人協会」会長より外務省アメリカ局第三課に宛てて、翌日、敦賀からウラジオストックに送還されることとなっている難民90名余りについては、当会の責任で速やかに日本から出国させるので、上陸を許可して欲しい、と要請。

・3月17日 訪欧中の松岡外相に代わって外務を司る近衛首相より（無論、松岡、近衛がじきじきに應對していたわけではあるまいが）、ヨーロッパとソ連の在外公館に向けて、（一）以後、欧州の避難民に対する日本通過ヴィザの発給場所をモスクワ大使館に限定し、（二）モスクワ大使館は、日本通過ヴィザ申請者のうち条件を満たしている者の数を半月ごとに行き先国別にして本省に報告すること、そして（三）本省は、その報告をうけた上で、ヴィザ発給可能数をモスクワ大使館に通知することにする旨、訓令。

・3月19日 近衛首相よりモスクワの建川大使とウラジオストックの根井総領事代理に宛てて、1940年12月20日以前に遡る日本通過ヴィザ（当然「杉原ヴィザ」とその偽造品を含む）は、すべてモスクワ大使館ないしウラジオストック総領事館で再検閲にかけ、行き先国の入国手続きが完了していることが確認された場合に限り、検印を擦し、所持者を日本行きの船に乗せるようにすること、指示。

19 Rotner Sakamoto, *ibid.*, pp.144-150; 阪東、前掲書、180-187頁。

・同日 ウラジオストックの根井総領事代理より本省に宛てて、「天草丸」の船長は、去る3月11日、出帆手続き終了後に乗客数が記録より多いことに気づいたけれども、ソ連側が記録外の乗客の下船を認めなかったため、やむなく総領事館から臨時証明書を出して出航させてやったものである旨、事後説明。

・3月20日 モスクワの建川大使より近衛首相に宛てて、前日19日に行われたソ連領事部との会談の席上、「天草丸」で敦賀からウラジオストックに戻され、現在、船中に留め置かれている74名の難民については、ソ連への再上陸を認めるわけにはいかないため、敦賀への逆送と日本上陸を許可して欲しいと求められた旨、報告。

・3月20日 ウラジオストックの根井総領事代理より近衛首相に宛てて、「天草丸」の次の便（翌21日出港か）には、前日の訓令に反して、1940年12月20日以前に発行された日本通過ヴィザの再検閲を経ていない者に加えて、ウラジオストック総領事館で発行された証明書を携えた者も乗船する予定である旨、通知。

・3月21日 モスクワの建川大使、ヴィルニユスからモスクワにやって来たポーランド・ユダヤ難民2名に「渡航証明書」を発行。²⁰⁾

・3月下旬（日付不鮮明） 近衛首相よりモスクワの建川大使に宛てて、「天草丸」の船中に留め置かれている74名の難民については、在東京オランダ大使館の計らいにより最終渡航先が確保されたため、敦賀への上陸を許可する旨、通知。

【記事29】昭和16（1941）年3月25日（火）夕刊2面「ユダヤ人また逆送／天草丸で敦賀上陸」

欧亜連絡船天草丸は廿三日午前九時敦賀に入港した。〔中略〕欧州の戦禍を遁れて流浪の旅を続けるユダヤ人部隊が百九十七名であつたが去る十六日浦汐に送還されたユダヤ人七十四名もまじつて再び同船で戻つてきたがこの一行は同日午後上陸を許された

これ以降の時期について詳述するための紙幅はすでに尽きたが、総じて、1941年3月16日、「天草丸」による74名のソ連逆送という異常事態をうけ、3月17日と19日、本省から出されることとなった訓令、指令に対し、モスクワの建川大使とウラジオストックの根井総領事代理が、度重なる反論と抗議の電報をもって応じ、6月22日、独ソ戦開戦によりシベリア・ルートの使用が物理的に不可能となるまで、日本を目指す避難民のソ連領内の移動について現地公館の裁量権を維持し続けたことが、厳密な数の特定は不可能ながら、最後期の少なからぬユダヤ難民たちの身柄を保護することになった。つとに「杉原ヴィザ」の有効性を「陰で支えた」人々の功績にスポットを当て続けてきたフリーライター、北出

20 高橋、前掲記事。

明も強調してやまないように、²¹⁾ リトアニアから日本まで、主にポーランド出自のユダヤ難民（本稿筆者の推定によれば2800名前後）の移動は、なにも杉原千畝による奇跡的英断の一突きによって自動的に可能となったわけではなく、そこには、オランダ人ユダヤ教神学生グトウィルト、リガのオランダ大使ド・デッカー、カウナスのオランダ名誉領事ツヴァルテンダイク、モスクワの建川美次大使、ウラジオストックの根井三郎総領事代理、「神戸ユダヤ人協会」、そして東京のオランダ代表部、これらすべての個人と組織による、機転、規則違反、訓令拒否、照会の努力、そして善意発動のバトンリレーがあったことを正しく理解すべきである（そこに「消極的」な協力者として、敦賀から逆送された書類不備者の再上陸をあくまでも拒んだソ連外交部を加えるのは、いささか皮肉に過ぎるだろうか）。

こうして1941年2月13日から4月2日まで、六航海にわたり、およそ二千人のユダヤ難民を敦賀に運んだ「天草丸」であったが、それ以降は「日満連絡船」に鞍替えし、代わる「欧亚連絡船」としては、前年まで航行していた「はるぴん丸」が返り咲くこととなった。

【記事30】昭和16（1941）年4月3日（木）朝刊3面「天草丸終航のお客」

欧亚連絡船天草丸は浦汐から内外船客百九十名を乗せて二日午後十一時敦賀に入港した、同船では〔中略〕欧州の戦禍を逃れて流浪の旅を続けるユダヤ人部隊百八十名も来敦、なほ同船は二日午後四時敦賀出帆敦賀から北鮮へ日満連絡に就航し欧亚連絡航路にはハルピン丸が六日出帆北鮮経由就航することになってゐる

しかし、その「はるぴん丸」も、4月中旬から5月下旬、ウラジオストック＝敦賀間を五回往復したところでドック入りが決まり、6月初旬と中旬の二便については「河南丸」が代行することとなった。

【記事31】昭和16（1941）年5月9日（金）夕刊2面「ハルピン丸／二回欠航」

欧亚連絡船ハルピン丸は中間ドックのため五月廿六日、六月六日の敦賀発二航海欠航する故に代船として河南丸が就航する〔全文〕

結局、1941年4月～6月、「はるぴん丸」と「河南丸」で敦賀にやって来たユダヤ難民の数として『福井新聞』が報じているのは、5月14日入港分の35名と――

【記事32】昭和16（1941）年5月14日（水）夕刊2面「ハルピン丸あす入港」

欧亚連絡船ハルピン丸は十四日朝七時敦賀に入港の予定であるが船客は浦汐から日

21 北出による最新の調査結果は、2018年5月11日、慶應義塾大学内の「萬來舎」で開かれた非公開の報告会で開陳された。その内容を盛り込んだ新作のいち早い刊行が待たれる。

本人二名、ソ連人六名、ユダヤ人三十五名が乗船してゐる [全文]

6月24日、最終入港分の25名（後出）だけであり、それ以外に6回ほどあったと推測される入港については、乗船者数に関する言及がない。

この間の情報の欠落を補うものとして、²²⁾ 4月25日『神戸新聞』に掲げられた小さな記事がある。

欧亜連絡船はるびん丸は二十四日朝北鮮經由浦塩から入港 [中略] また同船で海外へ逃避するユダヤ人団百余名がはる [ばる] [原文では濁点つき繰り返し記号] 来朝した²³⁾

最近、イスラエル国立資料館において、1940年8月21日発給の「杉原ヴィザ」と並んで、翌41年4月19日、ウラジオストックの根井総領事代理の手で「所定の条件を具備する」として署名、捺印された書類の所在が確認されたが、²⁴⁾ この書類の持ち主が乗り組んでいたのも、この4月24日入港の「はるびん丸」であった。

5月4日の『朝日新聞』（阪神版）では――

昨年末から今春はじめにかけて渡来した亡命者の群は亜欧連絡船敦賀到着毎に三百、四百といふ殺到ぶりだったが、その後減少し四日敦賀着のはるびん丸には僅か四十名が運ばれてくるにすぎない²⁵⁾

と報じられ、さらに6月6日の『朝日新聞』（大阪版）も――

ユダヤ人の避難者は去る三月を峠にして次第に減り始めた。五月中の浦潮航路上陸者はこのために計百六十六人で本年としてはもつとも少なく、四日に入港した河南丸では船客四十八名のうちユダヤ人と称するもの五名にすぎなかつた²⁶⁾

22 神戸市文書館が所蔵する『神戸新聞』『大阪毎日新聞』『朝日新聞』の関連記事複写コレクションを筆者に提供してくださった同館前館長、松本正三氏に、この場で深くお礼申し上げる。

23 「またユダヤ群来朝」、『神戸新聞』、1941年4月25日。

24 「杉原千畝氏の『命のビザ』／根井三郎氏（本県出身）も署名／継承示す貴重な資料／イスラエルで発見」、『宮崎日日新聞』、2017年8月15日、1面（21面にも関連記事）。

25 「米州でも『厳選主義』／ユダヤ人の内地滞留者激増か」、『朝日新聞』（阪神版）、1941年5月4日。

26 「世界の敦賀【二】ジプシーの唄／主流は外交官と商人／旅路は侘し落魄のドルと流民」、『朝日新聞』（大阪版）、1941年6月6日。

と伝えている。おそらく1941年5月以降、一隻に百名以上の大部隊といったことはなくなり、毎便数十～数名の範囲に収まるようになったため、『福井新聞』の記者、編集者も、もはやとりたてて紙面を賑わわせるほどのことはない、と判断したものと推察される。

敦賀入港日	船名	ユダヤ難民数	備考
2月3日頃	天草丸	不明	2月8日、ウラジオストックの根井総領事代理の電文によれば140～150名
2月13日	天草丸	350	
2月23日	天草丸	550余	
3月4日	天草丸	416	うち2名は二度目
3月13日	天草丸	361	
3月23日	天草丸	197	うち74名は二度目
4月2日	天草丸	180	
4月13日頃	はるぴん丸	不明	
4月24日	はるぴん丸	100余	
5月4日	はるぴん丸	40	
5月14日	はるぴん丸	35	
5月24日	はるぴん丸	不明	少なくとも6名
6月4日	河南丸	5	
6月14日	河南丸	不明	多くとも27名
6月24日	はるぴん丸	20	

【表】昭和16（1941）年2月～6月「欧亜連絡船」が輸送したユダヤ難民数
（『福井新聞』、『神戸新聞』、『朝日新聞』（大阪版、阪神版）による）

ただ、ドック入りを控えた5月24日入港の「はるぴん丸」船上では、あるユダヤ難民女性の流産という痛ましい出来事が起こっていた。

【記事33】昭和16（1941）年5月26日（月）朝刊3面「船中で遂に流産／波蘭土人夫妻の悲み」

既報廿四日敦賀に入港した欧亜連絡船はるぴん丸で欧州の戦禍をのがれて南米チリーに赴く二等船客ポーランド人元教員シルベルフェーイン、エドモンド氏（三八）の妻リタさん（二九）は同船が敦賀入港と同時に産気づき陣痛を訴へたので直ちに竹内医師を同船に迎へて手当てを加へたが四ヶ月の男児を流産したりタさんは男児流産と知るや日頃待望の愛児をもうけた喜びも一瞬悲しみと変わり医師に対し「どうか死から救つてほしい」と涙で哀願するさまは並居る人々の涙をそゝつたがりタさんは□の□船で身体極度に疲労しかてゝ加へてはるぴん丸が日本海で南東の烈風に遭遇し難航した結果ゆられて流産したのである、目下夫妻とも敦賀市津内小林別館で静養中であるが異国でわが日本人の情けに感泣してゐる [全文]

記事中、この「シルベルフェーイン」夫妻は「ポーランド人」とのみ記されていて、「ユダヤ」との言明はない。しかし、彼らがユダヤ難民であったことは、兵庫県が1941年8月31日に作成した「避難猶太人現存者表」（アジア歴史資料センター所蔵）によって確認される。そこでは、神戸滞留者322名中、256、257番目の欄に「シルベルフェニグ ボハルジヤ」「シルベルフェニグ ロザルジヤ」の名前が見え、それぞれの年齢が39歳、30歳と記されている。前者の職業が「教師」であり、日本入国日も「5月24日」とあることから、上の記事で報じられている夫婦であることが確実視される。この夫婦とおぼしき名前が「杉原リスト」には見当たらないため、彼らは「杉原ヴィザ」以外の手段（偽造ヴィザ、あるいはモスクワの建川大使やウラジオストックの根井総領事代理が発行した証明書）をもって日本までやって来た可能性がある。また、1941年秋、神戸から上海に移送されたポーランド籍の人々の名は、上海のポーランド領事館が作成していた在留ポーランド人名簿に記載されているのが普通であるが、²⁷⁾ この夫婦らしき名前はそこにも見当たらないため、1941年8月31日以降、神戸から上海以外の場所（たとえば記事中で渡航先として言及されているチリ）へ、つつがなく旅立つことができたものと推測される。

この流産事件については、長年、地元・敦賀で「日本海地誌調査研究会」を主宰してこられた井上脩氏（元・敦賀市教育編さん室室長）が、関係者の証言収録に成功している。

◎難民の医療に献身

昭和16年（1940）2月〔正しくは5月〕、敦賀港入港の天草丸（2,509トン）〔正しくは「はるびん丸」〕に乗船していた難民の一人が日本海上で流産し、瀕死の状態の上陸した。

この医療に当たった故竹内隆良（当時42）氏が事後措置を行い、無事全快させた。

当初この医師が誰であったか判らず、調査に苦心していたが、ふとしたことから竹内氏の令息から話を聞くことができ、加えて当時看護婦をしていた永井つね（当時18現92）さんが粟野地区内に在住していることも判明した。²⁸⁾

現時点で本稿の筆者は、『福井新聞』、『神戸新聞』、『朝日新聞』、そのいずれの関係記事中でも、ユダヤ難民としてやって来た人々のなかから日本の地で死者を出したという報道に接していない。四ヶ月男児の流産は確かに痛ましいが、妊婦の命までが失われる事態を間一髪のところまで食い止めた功労者として、この敦賀市の医師と看護婦の名が、戦時期日

27 'The Ledger listing in handwriting persons registered at the Polish consulate in Shanghai, 1934-1941'. 現存する三つの写本が、アメリカ議会図書館、アメリカ・ホロコースト記念館、スタンフォード大学フーヴァー研究所にそれぞれ所蔵されている。

28 井上脩『人道の港「敦賀港」平成14年度 紀要創刊号抜刷』、日本海地誌調査研究会、2016年、45頁。

本・ユダヤ難民史の片隅に銘記されてしかるべきであろう。

以後、5月末から6月末まで、少数ながらも到着し続けていたと見られるユダヤ難民について、『福井新聞』から得られる情報はきわめて乏しい。

【記事34】昭和16（1941）年5月27日（火）朝刊3面「河南丸出帆／船客廿五名で」

欧亜連絡船河南丸は船客廿五名を乗せて廿六日午後六時敦賀出帆北鮮經由浦汐にむかつた〔中略〕廿四日入港のハルピン丸で来敦したユダヤ系ルーマニア人四名が査証不備の点で入国出来ず浦汐むけ送還された

この四名のその後についても、『福井新聞』は続報を与えておらず、6月14日に入港した「はるぴん丸」に乗船していたユダヤ難民の数も不明である。

【記事35】昭和16（1941）年6月16日（月）朝刊3面「ソ連敦賀新領事／フィルソフ氏着任」

欧亜連絡船河南丸は浦汐から卅三名北鮮から一名の船客を乗せて予定よりおくれて十四日午後九時半敦賀に入港した同船で新任ソ連敦賀領事ワシリーア、フィルソフ氏（三八）〔とその他七名が到着したほか〕ユダヤ人が来着した〔後略〕

そのような折に飛び込んできたのが、6月22日（日）、独ソ開戦の一報である。

【記事36】昭和16（1941）年6月25日（水）夕刊1面「戦争になるとは／夢にも思はなかつた／敦賀に帰着の茂森氏語る」

建川ソ連大使の秘書として約半歳日ソ国交調整に活躍した茂森唯武〔正しくは唯士〕氏（四五）が二十四日朝敦賀に入港した欧亜連絡船ハルピン丸で帰朝し同九時卅一分敦賀駅発列車で東上した、同氏は独ソ開戦についてモスクワの近況を次の如く語った

独ソ開戦の報は羅津でラヂオによつて聞いたが外交界では独ソ緊迫説を独の対ソ威嚇ゼスチャとし独ソ戦は今の処ろ開始されぬものと見てゐた、ソ連首脳部も、恐らくは独ソ戦がこんなに早く起るとは予期してはゐなかつたと思はれる〔中略〕なほ同船で〔中略〕ユダヤ人二十名が来着し船客百二十四名であつた

筆者の検索による限り、この記事が、『福井新聞』紙上、ユダヤ難民到来の最終報である。「はるぴん丸」の持ち会社、日本海汽船は、この事態をうけて、すでに直行便ではなく北鮮經由となっていたウラジオストック＝敦賀間の「欧亜連絡船」のさらなるダイヤ見直しを迫られる。

【記事37】昭和16（1941）年7月2日（水）夕刊2面「欧亜連絡船貨物絶ゆ／連絡船ダイヤも変更さる」

独ソ開戦により亜欧ルート遮断されたため日本発亜欧連絡貨物は去る二十六日来まったく杜絶の状態にはいつたので日本海汽船はるぴん丸の浦汐碇泊時間を短縮し敦賀北鮮相互間の輸送に主力をそそぐこととなり七月六日敦賀発同船から当分の間左のごとくダイヤを変更した〔後略〕

すなわち、ウラジオストック＝敦賀間を直行で結んでいた時期には、必ず二晩か三晩、ウラジオストックに碇泊し、のちに北鮮経由となった後も、最低一晩はウラジオストックに碇泊していた「はるぴん丸」が、以後、毎月十の日に半日の寄港で足りる、とされたのである。さらに二週間後には、「はるぴん丸」をウラジオストックまで航行させる必要さえもはやなくなったとの判断から、「はるぴん丸」は羅津で引き返すこととなり、どうしてもウラジオストックまで行きたい船客は、羅津から「河南丸」に乗り換えなければならなくなった。

*

かくして一年二ヶ月に及んだ日本海航路によるユダヤ難民到来の終焉は、独ソ戦開始に伴う「欧亜連絡船」そのものの消滅にびたりと重なり合いながら、種々の「時間差」をもって閉ざされてしまった重い鉄扉の印象を残している。日本到来者の「その後」とともに、われわれの今後の調査、研究に委ねられているのは、リトアニアを出立しなかった人々、ならびに出立していながら、モスクワ、ウラジオストックを目指す途上でその鉄扉が閉ざされてしまった人々の「その後」でもあろう。（完）

（かんの・けんじ、本会会員、東京理科大学教授）

*本研究はJSPS科研費、平成29～32年、基盤研究(C)(1) 課題番号17K02041の助成を受けたものである。

**The Arrival of Jewish Refugees to Wartime Japan
as reported in the local newspaper *Fukui Shinbun* (Part II: 1941)**

Kenji KANNO

This work is based on an exhaustive search of articles in the newspaper *Fukui Shinbun* concerning the Jewish refugees' landing at Tsuruga, Fukui Prefecture, Japan. Following the first part, which covered the period May-December 1940, this second and final part treats the period January-July 1941.

After three months and a half of silence on the subject, on 15th February 1941 *Fukui Shinbun* hardly hides its astonishment at the news that there are over 350 Jewish refugees on board a single Europe-Asia liner *Amakusa Maru* arriving from Vladivostok. The same steamship will have ferried approximately two thousand refugees to Tsuruga over its six navigations across the Sea of Japan before mid-April 1941.

This second wave of arrivals in the early spring of 1941, after the initial wave in the autumn of 1940, would be attributed to a policy of naturalisation imposed by the Comintern on the newly-sovietised Lithuania in December 1940: all refugees having poured into Lithuania found themselves obliged to choose, by 25th January 1941, whether to become Soviet citizens or to be considered as stateless. This seemed to constitute a strong 'push factor' for many of potential candidates for exile to the Far East. In this sense, the Jewish refugees who braved the freezing Siberian temperatures and the turbulent Sea of Japan in the first months of 1941 should henceforth be described, not only as escapees from the Nazi persecution, but also from being integrated into the Communist regime.

Curiously enough, among the names of the refugees staying in Kobe as they were registered by Hyogo Prefecture on 31st August 1941, there is a number missing from the Sugihara visa list made in Kaunas in summer 1940. This discrepancy leads us to a new investigation on the travel certificates and transit visas issued by two Japanese diplomats: Yoshitsugu Tatekawa (1880-1945), Ambassador in Moscow, and Saburo Nei (1902-1990), acting Consul-General in Vladivostok. By uncovering these obscure characters and facts, we will finally be able to fully seize the story of 'Visas for Life'.